

# SAPPORO 教区 NEWS

発行：カトリック札幌司教区事務局広報部  
〒060-0031 札幌市中央区北1条東6丁目10

Tel. 011-241-2785 / ホームページ：http://www.csd.or.jp

## 二〇一〇年平和旬間を 迎えるにあたって

日本カトリック司教協議会 会長

池 長 潤 大司教

池長潤大司教（大阪教区・左写真）は、六月の司教総会で、岡田武夫大司教（東京教区）に変わり、日本カトリック司教協議会会長に就任し、平和旬間にあたり次のようなメッセージを皆さんに発信しました。



日本のカトリック教会は、毎年八月六日から十五日までを平和旬間としています。一九八一年にヨハネ・パウロ二世前教皇が来日し、広島と長崎で平和のためのアピールを出されたことを機に、この平和旬間が始まりました。広島の原爆記念日から、長崎の原爆記念日を挟んで、終戦記念日までのこの十日間は、日本のカトリック信者にとつ

日本国内では沖縄の「もう基地は要らない」という声です。

昨年、米国のオバマ大統領はブラハ宣言で核兵器のない世界の実現を訴えました。日本に対する直接的謝罪ではないにしろ、人類史上初めて原子爆弾を投下した自国の「道義的責任」に触れました。単に核廃絶に向かおうという理想を述べたのではなく、それがヨハネ・パウロ二世教皇の言葉のように過去の過ちに目を向けたところからの決意であったことに意味があります。去る五月、長崎教区の高見三明大司教は原爆によって廃墟となった浦上の地から拾われた「被爆マリア」を携え、米国民と国連関係者に核廃絶を訴えました。恐ろしい原爆の証言者としての「被爆マリア」は、数知れない原爆被害者すべての戦争被害者の叫びを、焼けただれたその姿をもって自らのうちに表わし、世界の人々に平和の大切さを訴え続けています。私たちは「将来に対する責任を担う」ためにも、こうした被害者たちの叫びにま

ず耳を傾けなければなりません。日本も自国のことを振り返らなければなりません。今年の八月二十二日は日本が韓国を併合し朝鮮半島を植民地化した「韓国併合」条約締結一〇〇年にあたりです。この歴史の大切な節目に、私たちカトリック教会の責任を含め、日本の植民地政策がどのようなものであったか、それが人々をどう傷つけてしまったのかを真摯に振り返ることが大切です。日本の司教団も「戦後六十年平和アピール」で「わたしたちは過去の植民地支配や武力による侵略という歴史的事実を真摯に受け止め、反省し、その歴史認識を共有することが求められています。そのことが二度と同じ悲劇を繰り返さないことを誓うことになり、将来に対する責任を担うことにもなると確信するものです」と述べました。神の前に勇気を持って自らの過ちを認め、赦しを請うことは自らを卑下することではなく、かえってキリストが求める真の人間の姿に近づくことなのです。この姿勢をもってこそキリストは、「敵意という隔ての壁を取り壊し」、真の和解へと私たちを導いてくれる

のです。今年も迎える平和旬間において、今一度、新たな決意のもとに平和を祈り、平和のために行動していきましよう。

**札幌地区**  
**二〇一〇年平和を祈る**  
**四十日間を実施**

「平和のために働く人は幸い」をテーマに、七月七日（水）の平和集会から、八月十五日（日）の平和祈願ミサと平和行進までの四十日間を平和のために祈る。

実行委員会では、一緒に八月六日（金）八時十五分にはヒロシマ原爆犠牲者のために、八月九日（月）十一時二分にはナガサキ原爆被害者のために、八月十五日（日）十二時にはすべての戦争犠牲者のために「平和の鐘」を鳴らすことを提唱しています。ともに平和のために祈りましょう。

また、七月二十四日（土）には北一条教会で平和講演会を行った。講演者は菊地功司教で、マザーテレサ生誕一〇〇周年「最も小さき者のひとりに」と題して、マザーテレサの行った御業や、ルワンダでの虐殺や難民について語った。

# 聖ヨハネ・マリア・ビアンネの帰天百五十周年を 記念し制定した司祭職の聖性を祝う司祭年が閉幕

(2009年6月18日から2010年6月11日まで)

## パチカンでは・・・

教皇ベネディクト十六世と、枢機卿八十人、大司教と司教三五〇人、司祭約一万五千人が祭服を着けて、共に、サンピエトロ広場で司祭年閉幕のミサをささげた。このように多くの司祭団が行う典礼はかつてなく、パチカンで開かれたものでは最大規模という。

教皇は説教の中で、「司祭職の聖性を祝うこの喜びの年に、司祭たちの罪が明るみになり、特に児童に対する虐待で、神の私たちへの心遣いを世に示すはずの司祭職が、それとは全く逆の様相を呈してしまった。『司祭年』は司祭による性的虐待の不幸事で損なわれたかもしれないが、かえって教会内に『清めへの呼び掛け』をもたらした。」と語り、「カトリック教会は、神からと『被害に遭った人々』からのゆるしを請い、こうした虐待行為が二度と起きないために出来る事はすべて行うことを約束する。」と語った。サンピエ

トロ広場の強い陽光の下に集った、枢機卿、司教、司祭からは同意を示す拍手が繰り返されたという。

## 日本国内では・・・

福岡教区では、「司祭年感謝ミサ」で宮原司教が、ビアンネの言葉「司祭職とはイエスのみ心の愛です」を引用して、限らない神の愛に委ねて司祭の召命のために祈り、神の業に協力していこうと述べ、教皇が司祭年を制定した理由として「全司祭の心の刷新」を挙げ、現代において福音をより明確に証しするため、神からどれ程の恵みを頂いているか、感謝の心で自分を見つめ直す事が大切だと述べた。さらに、ミサとゆるし、ここに司祭の本来の役割がある、司祭固有の役割であるこれらの秘跡を特別に大切にしていこうと述べた。

そしてミサに先立ち、金祝司祭の川添神父が講演し、長年司祭職を勤め上げられたのは、イエスの愛は勿論のことであるが、月に一度の司祭の交わりを大切にしていくことをあげた。司祭がともに集い、食し、語り合うこと、これが挫折しない秘訣だったという。しかし、現代において、司祭の集まりは事務的になっていないか。交通機関など

が便利になって、会議だけに終わっていないかと問いかけている。さらに、司祭は宣教師として前に進むことは当然であるが、同時に、司祭は司牧者でもあるという。福音を受け取ってくださる方の数より、失っている方の数の方が多いのではないかと、すなわち、司祭の言動によって教会から遠ざかっている方が多いのではないかと語り司祭に猛省を促していた。また、信徒も司祭や司教にあまりに情報報や誤った情報を伝えるのではなく、司牧者が的確な判断が行えるように、信徒は正確な情報を伝えることが大切であると語ったという。

また、東京教区では、岡田大司教が司祭年閉幕ミサで、「司祭の心身の休養と霊魂の安息」の刷新を呼びかけ、後日、東京教区司祭評議会の答申をもとに「司祭の休養・霊的生活の刷新」と題するメッセージを東京教区内の信者に向けて発表した。

メッセージは、世界中で問題になった司祭による児童性的虐待を挙げ、セクシヤルハララスメント(性的嫌がらせ)、パワーハララスメント(地位などを利用した嫌がらせ)の問題にも触れながら、「司祭が群れを養うどころか群れを傷つけること、群れによって自分の満足を求めることがあつてはならないことであり、恥ずべきことです。」と語り、また一方で、「司祭の高齢化や病氣、そして疲労し消耗している司祭が増えていくことは教会の大きな課題である。」と訴えている。そして、司祭たちは、消費社会からの刺激と誘惑にさらされ、トラブル、信徒との軋轢(あつれき)、司教・司祭同士の理解と協力の不足などでストレスを抱えていると指摘している。

その現実を前に東京教区は、見直すべき課題の中で、先ず「最も基本的な課題である司祭の心身の休養と安息」の刷新に焦点を絞り、次の三段階の方針を決め、制度の確立のために諸課題を検討していくこととなる。また、現行のサバティカル(長期の研修など)制度の規定を当面凍結し、サバティカルを望む司祭については、個々に大司教が判断するという。

▼第一段階 週一日は必ず休養日とし、信徒の理解を求める

▼第二段階 教会法に従い、毎年最大限一ヶ月の休暇を、継続的であれ断続的であれ取ることができ。また、毎年少なくとも一回、一つの日曜日はさむ八日以上連続した休暇(フォートナイト(二週間)休暇)をとらなければならない

▼第三段階 人事異動の際、また同じ任地で働く場合は、三年ごとに別枠で最大限一ヶ月の連続した休暇(リフレッシュ休暇)を取ることができる

そして岡田大司教は、大切なのは休暇をどう過ごすかであることを強調している。司祭数の減少・高齢化が進んでいる中で、司祭の心身の休養をどうすべきかは、札幌教区でも以前から話題にのぼっているが、具体的な施策を取っていくことが必要な段階にきているのだろう。

# 全道司祭会議開催

六月二十八日(月) から三十日(水) の三日間、花川セミナーハウスとマリア院を会場に開催

『北海道の福音宣教への示唆Ⅱ小共同体について ガーナと新潟教区の体験を通して見えてきたことⅡ』をテーマに、教区管理者の菊地功司教が講演



の信徒は三人しかおらず、将来、外国から来た人やその子どもたちが教会の中心になるだろうし、今も中心で活動しており教会建設に結びついており。これが農村部の実態である。

第二は、幼稚園をはじめとするカトリック教育機関の存在。教会は、当初、司祭の人員費確保のために幼稚園を開設したのがほとんどであるが、現代において、神学校で教育論も経営論も勉強してこなかった司祭が、即対応できる状態ではなく、ビジネスマインドなくして学校等の運営は難しいのが現実であると語った。

海外からの信徒の存在。新潟教区において、都市部における教会は、地域の人々との接点がほとんどなくなってきたのが現状であるが、農村部の新庄で○人位のミサを行ったことがあるが、その人たちは農家のお嫁にきたフィリピン人のお母さんやその子供たちである。そして、子どもはほとんどが幼児洗礼を受けている。新庄では日本人

して、これからの千年紀はアジアの宣教時代であり、アジアの教会とともに宣教することが大切であるとのこと。アジアの教会の人々が自分の信仰を強く証しする姿は日本人にはないものがある。同時に、わたしたちに相手に尊敬の念をもつた対話の姿勢がないと、自分の信じる物語を語れない。宣教共同体に脱皮できるように考えてほしいとも語った。

後半は、アフリカのガーナとルワンダでの体験を通して、画像を交えながら講演してくれた。

ガーナの O S O N S O N 村では、巡回教会を多く抱える信徒三千人の教会の主任司祭として、現地の風習とキリスト教の教えの矛盾点などを取り混ぜながら司牧体験を語った。

新たな教区ビジョン策定のための準備作業に入る

全道司祭会議に先立ち、花川マリア院で、教区の六地区から委員の司祭十五名(一名欠席)が集まり検討。会議では、勝谷神父(札幌地区区長)が議長となり、各地区の現状や地区で話し合われた内容を報告しあい、教区として今後検討すべき事項を出し合った。しかし、検討する問題を精査するには、組織とさらなる時間が必要であることで一致し、今後プロジェクトチームをつくって、諸問題を具体的に検討精査した上で、司祭連絡会に諮っていくことになった。

また、ルワンダでは、カトリックが六割、プロテスタントを交えたと人口の九割がクリスチャンの国でありながら、何故、フツ族とツチ族との間で虐殺が起きたのか。また、隣国の難民

講演の前半は、新潟教区の実情やそのことから学んだことに触れ、新潟教区における重要な三つの課題や取り組むべき優先課題を紹介した。

第一は、教会がこれまで入り込みことの出来なかつた「草の根」で信仰を生き

る海外からの信徒の存在。新潟教区において、都市部における教会は、地域の人々との接点がほとんどなくなってきたのが現状であるが、農村部の新庄で○人位のミサを行ったことがあるが、その人たちは農家のお嫁にきたフィリピン人のお母さんやその子供たちである。そして、子どもはほとんどが幼児洗礼を受けている。新庄では日本人

の信徒は三人しかおらず、将来、外国から来た人やその子どもたちが教会の中心になるだろうし、今も中心で活動しており教会建設に結びついており。これが農村部の実態である。

第二は、幼稚園をはじめとするカトリック教育機関の存在。教会は、当初、司祭の人員費確保のために幼稚園を開設したのがほとんどであるが、現代において、神学校で教育論も経営論も勉強してこなかった司祭が、即対応できる状態ではなく、ビジネスマインドなくして学校等の運営は難しいのが現実であると語った。



また、ルワンダでは、カトリックが六割、プロテスタントを交えたと人口の九割がクリスチャンの国でありながら、何故、フツ族とツチ族との間で虐殺が起きたのか。また、隣国の難民

## 教区司祭連絡会議を開催

(司祭連絡会とは、札幌司教空座のため、教区管理者が司祭評議会に代わるものとして設置)

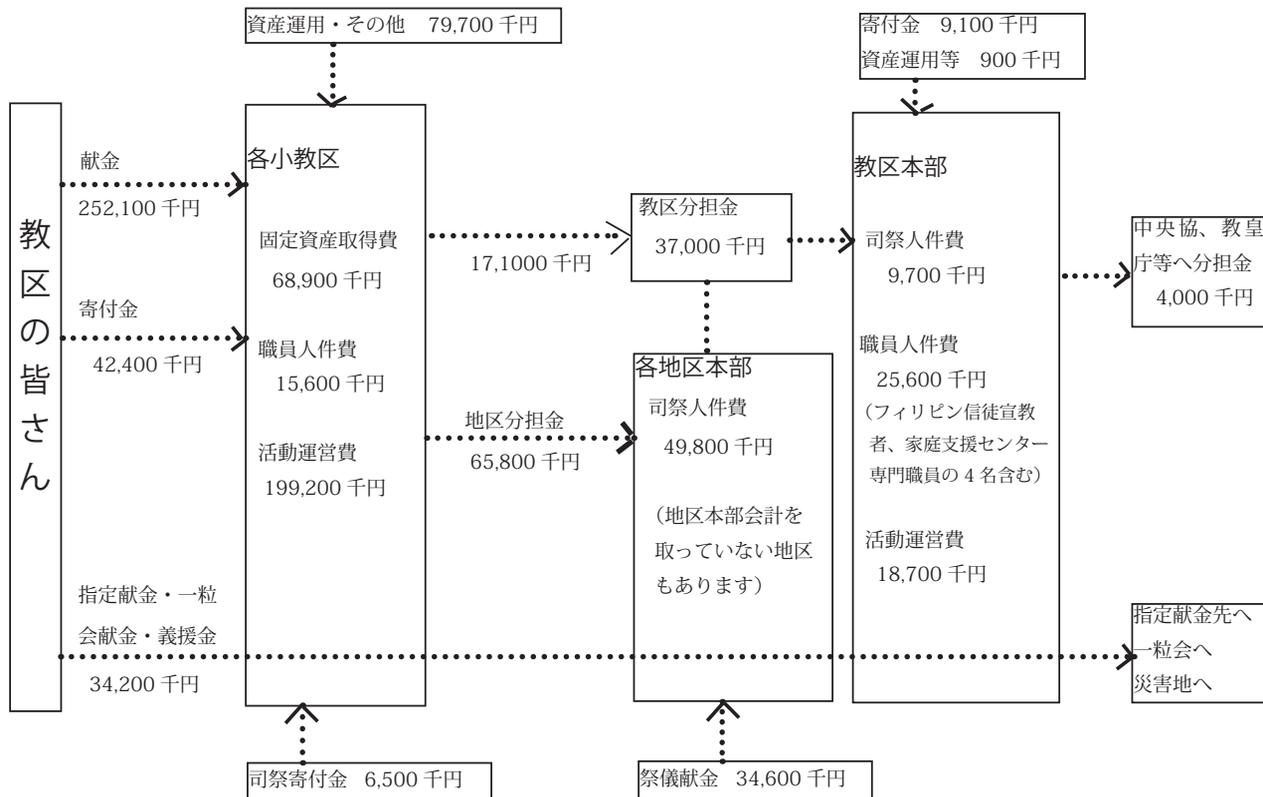
新たな教区ビジョン策定のための準備作業に入る

全道司祭会議に先立ち、花川マリア院で、教区の六地区から委員の司祭十五名(一名欠席)が集まり検討。会議では、勝谷神父(札幌地区区長)が議長となり、各地区の現状や地区で話し合われた内容を報告しあい、教区として今後検討すべき事項を出し合った。しかし、検討する問題を精査するには、組織とさらなる時間が必要であることで一致し、今後プロジェクトチームをつくって、諸問題を具体的に検討精査した上で、司祭連絡会に諮っていくことになった。

(※注 異邦人を見極める時にシボレテと言わせてその発音で判断した。)

# 札幌教区2009年度決算概況報告

(2009年4月1日～2010年3月31日)  
収入と支出の動きを図式化して報告します



## 二〇〇九年度教区会計報告にあたって

### 神に感謝

皆様方のご奉仕と献金・寄付に心より感謝申し上げます。

会計担当者の皆様には、日頃の取りまとめから、年度末の報告書作成・提出とご協力に感謝申し上げます。

皆様のご協力により、管轄官庁の北海道に無事提出し報告することができました。ここに、感謝と共にご報告させていただきます。

かかる経済状況の下にあつて、皆様からの奉仕、献金・寄付金等のご協力によって、二〇〇九年度の札幌教区の宣教司牧活動を遂行できましたことに心より感謝致します。

昨年十一月に菊地司教様が教区管理者に就任なされ、新しい司教が誕生してから札幌教区の運営を少しでもし易くするために、

今から準備しておこうということになりました。現在、教区司祭連絡会(評議会に変わる組織)で、教区が抱えている諸問題をとりあげ検討しています。財政的なこともその一つの課題に挙げられております。

皆さんもご存知のように、北海道の教会の中には、信徒数が少ない小さな教会が多くあります。それらの教会は建物の維持管理が精一杯で、建物の修繕にまわす余裕がない教会もみうけられます。これ以上建物の老朽化が進めば、修繕や建て替えができない教会では、ミサを奉げる方法を何か考えなければなりません。近い将来の問題として考えていかなければならぬ大きな課題の一つです。

人口の推移やその予測、司祭数の減少などによる教会の再配置の検討なども今後の大きな課題の一つとなろうかと思われませんが、これらのことを踏まえながら

も、小さな教会を互いに助け合う観点から、教会建設費や修繕費の、ブロック単位や地区単位、あるいは教区単位での一元化を図り、別途、検討委員会的な組織を立ち上げるか、現状のある委員会に委嘱するかの方法等で、修繕や建て替えの全体的な計画を練って解決していくことも近い将来必要になってくるだろうと考えられます。

そして、様々な体制が整えばの前提が付きませんが、司祭等の奉仕者や宣教活動、建物の維持管理を支援するため、皆様が教会で納めている教会維持費などの献金や寄付金の奉納金に關しても、信徒の皆様のご理解を頂き、ブロックや地区、教区などの単位で有効に活用していけるようにしていかなければならないかもしれません。

神様の恵みとみ心に感謝致しますとともに、これからも、皆様と共に、神様のみに従い歩んでいきたいと考えています。

# ネットやWebサイトによる

## 新しい宣教の可能性を探る

パウロ家族主催

「第四十四回世界広報の日 特別企画」開催  
▼鹿児島教区の郡山司教を迎えて麹町教会で



に発表されます。広報の日は復活節第六主日に定められていますので、メッセージが発表されてから、その内容を読み深め、それから何を？どのように？どこまで可能か？など話し合いを重ねました。」

ルとして、企画の実行に動き出しました。」

「デジタルコミュニケーションの世界に目を向け、ブログを開いておられる鹿児島教区長郡山司教様はじめ、SIGNIS JAPANのメンバー、韓国のパウロ会の『SKYPE（スカイプ）』を利用してのインタビュー、また当日の会場の交渉など、短い時間に担当の会員一人ひとりが力を出し合って当日まで漕ぎ着けました。」

多くの皆さんの協力のおかげで、『世界広報の日』の前日の五月八日に開催し、約一五〇名の方々が参加してくださいました。この体験を生かしこれからもパウロの精神で福音宣教に邁進

二年前の「パウロ年」以来のことで、主催したパウロ家族の一人であるシスター北爪は、「わたくしたちパウロ家族は、パウロの精神で、日本の社会と教会の中に、コミュニケーション手段を使って、『道、真理、いのちである師イエスを証しする』使命があります。」

「ご存知のように今年の教皇様のメッセージのテーマは司祭年をうけて『司祭とデジタル世界における司牧、みことばに仕える新しいメディア』でした。教皇様は、社会に変革をもたらすデジタル・コミュニケーションの世界で、司祭たちが神のみことばのために大きな奉仕ができる」と宣言し、司祭たちを励まされました。この呼びかけは、司祭だけでなく、教会全体に向けられています。そこで、社会的コミュニケーションによる福音宣教に従事するわたくしたちパウロ家族は、教皇様のメッセージを

「ご存知のように今年の教皇様のメッセージのテーマは司祭年をうけて『司祭とデジタル世界における司牧、みことばに仕える新しいメディア』でした。教皇様は、社会に変革をもたらすデジタル・コミュニケーションの世界で、司祭たちが神のみことばのために大きな奉仕ができる」と宣言し、司祭たちを励まされました。この呼びかけは、司祭だけでなく、教会全体に向けられています。そこで、社会的コミュニケーションによる福音宣教に従事するわたくしたちパウロ家族は、教皇様のメッセージを

講師は自ら積極的にブログやWebサイトを駆使してデジタル宣教に果敢にチャレンジしている郡山健次郎・鹿児島司教（67・左写真）。ネット宣教を始めたきっかけや現状、今後の展望とネットの秘める可能性について約一時間にわたって語り、新しい宣教の地平を参加者に提示しました。またSIGNIS JAPAN（日本カトリックメディア協議会）幸田和生・顧問司教（メンバーの山田千鶴さんが、日本でブログやWebサイトを開設して宣教や対話の場を開いている司教や司祭たちの実際を映像と寸評とで紹介し、教会における「デジタルコミュニケーション」の広がりを

「郡山司教は講話の中で、教皇メッセージに触れて、ベネディクト十六世が司祭たちに最新の視聴覚教材を自在に駆使して福音を述べ伝えるよう促しておられること、現代メディアが提供している『新しいアゴラ』広

「世界広報の日」前日の五月八日（土）午後、「パウロ家族」聖パウロ修道会、聖パウロ女子修道会、師イエズス修道女会の三者による「広報の日特別企画」デジタルコミュニケーションによる福音宣教」が東京・千代田区の麹町（聖イグナチオ）教会ヨセフホールで開かれた。

パウロ家族が共同でイベントを企画・実施するのは

「教皇様の広報の日のメッセージは毎年一月二十四日の聖フランシスコ・サレジオ司教教会博士の記念日

「教皇様の広報の日のメッセージは毎年一月二十四日の聖フランシスコ・サレジオ司教教会博士の記念日



「教皇様の広報の日のメッセージは毎年一月二十四日の聖フランシスコ・サレジオ司教教会博士の記念日

「教皇様の広報の日のメッセージは毎年一月二十四日の聖フランシスコ・サレジオ司教教会博士の記念日

場＝始終人が入れ替わり集い、議論しあうコミュニティ（セッションの場）」に立ち、熱意をもって福音を告げ知らせる者となるように、というくだりを読むにつけ、「ワクワクどきどきしてくる」と宣教が新しい局面に入っている喜びを率直に表明しました。

「パパ様からネット宣教へのエールをもらったようであれしい」と語る郡山司教のデジタル宣教の始まりは十年以上も前のこと。「ネットサーファー」と呼ばれるネット検索者が全国に五〇〇万人もいるという新聞記事を読んだことがはじまり。この膨大な数の人々を何とか「福音の網」に引っ掛けたい。（ちなみにWebとはクモの網を指す言葉だそうです）このインターネットを使った宣教構想を周囲の司祭たちに漏らしませんが、当初は誰も相手にしてくれなかったそうです。その後一九九七年に奄美に異動となり、七つの教会を担当します。各教会を一つずつ回ってミサをささげ、

病人を訪問するというのが主な仕事。いろいろな教会活動があるわけでもなく町の教会にいた時より時間的には恵まれていました。たまたま祖母の見舞いに来ていた姪に頼んでホームページを開設することに。

その目的は二つ。主日のミサの説教を発信することと七つの教会の紹介、「ネット宣教」の始まりでした。その後、良き協力者にも恵まれ、教会の他に幼稚園も加わり「子育てフォーラム」を通してお母さんたちとの交流も生まれました。ミサの説教も文字から音声に変わり、今では動画の配信も。今年の「年頭教書」で郡山司教は二〇一〇年を「ネット宣教元年」と宣言し、「ネット宣教委員会」を発足させ各小教区に宣教の道具としてコンピューターを設置、ホームページを開設するよう強く勧めました。そして委員と共に自らも小教区を訪問して信徒たちに直接語りかけて、鹿児島教区におけるネット宣教の基盤づくりを進めてい

るということでした。「信仰とはイメージの世界であり、イメージの弱い頭だけ」の信仰は脆弱」という同司教は、今後「ミサの動画配信」を計画しているそうです。「パウロ家族の創立者である福者アルベリオ・ネ神父は『宣教のためなら世界の涯まで行きなさい』と言っている。今、（ネットによって）そうした環境が目の前にあるのに、ただ指をくわえて見ているだけで果たしてよいのか」と参加者を励ました郡山司教は、「病床にある人やさまざまな事情でミサに行けない人、介護に当たる人、さらにいわゆる『教会を離れている人』たち」にネットを使った教会参加を呼びかけたいと夢を披露しました。

アメリカや韓国などでは既にミサを中継で動画配信しているそうで、「それが有効かどうかは別にして、（動画を見ることで）一緒に祈ることはできる。何もしないで教会離れを嘆くよりも、ネットを使って何かに

挑戦するほうがはるかによい。とにかく楽しい『イメージ』を抱きながら、『ネット宣教元年』の今年、パパ様の希望にも沿いながら楽しくネット環境を整えていきたい」と、明るく愉快に話を終えられました。続いて、SIGNIS JAPAN ANメンバの山田千鶴さんがブログやWebサイトを日本で開催している司教や司祭たちの映像を実際にスクリーンに映写しながら、それぞれの特徴を寸評しました。司教では郡山司教をはじめルワンダやコンゴなど諸外国の事情を豊富な写真と共に紹介している菊地功・新潟教区司教(51)の「新潟司教の日記」（英語版も）、さいたま教区の谷大二司教(57)の「司教館の庭」では迷い込んできたメスのラブラドル犬に

「マリア様」と名づけてかわいがっている様子が紹介され、思わず会場から和やかな笑いがこぼれました。また前鹿児島教区司教の糸永真一司教(81)の読み応えのある重厚な「カトリック

時評」は、現役の教区長を退いた立場で自由に、そして読者からの多くの質問や疑問、書き込みに誠実・丁寧に答えている姿勢が印象的でした。東京教区補佐司教の幸田和生司教(55)の開いている「福音のヒント」や「小グループのために」では、このサイトを参考に

して資料をそろえれば指導者がいなくても聖書勉強会が開けるといふ実践的なヒントが満載されているなど、随所に司教たちの創意と工夫、信念、信仰理解のうかがえるサイト紹介となりました。このほか司祭たちのブログやサイトも多数紹介され、こうしたデジタル機器を使った教会PRや福音宣教が年々広がっていることを感じさせるコーナーとなりました。

SIGNIS JAPAN  
カトリックメディア協議会  
第三十四回カトリック  
映画賞授賞式・上映会

六月十二日、神奈川県川崎市麻生区の「川崎市アートセンター」で開催

今年は一九七六年に「カトリック映画賞」を設けてから初めて東京以外の開催となり、入場者の「入り」が心配されましたが、当日は二〇〇席の座席がほぼ満席となり、補助席を出す盛況となりました。

この「日本カトリック映画賞」は前々年の十二月から前年の十一月までに公開



幸田司教から表彰される伊勢監督写真はSIGNIS JAPAN提供

された日本映画の中から、カトリックの福音の価値観に合致した映画を選び、その監督を公に表彰すること、で良質の映画の普及と、ひいては福音宣教に役立てようと毎年開催しています。今回は伊勢真一監督作品の「風のかたち・小児がんと仲間たちの十年」が選ばれ、自身映画監督でもあるSIGNIS JAPAN 会長・千葉茂樹氏から賞状が、顧問司教の幸田和生東京教区補佐司教からトロフィーがそれぞれ伊勢監督に授与されました。また授賞式と作品の上映に先立って、マザーテレサの「生命尊重」の精神を受け継ぐ千葉会長が脚本を手がけた、アニメ映画「こちらたまご応答ねがいます」も上映されました。

## SIGNIS JAPAN 顧問司教の晴佐久昌英神父が選定理由を語る

カトリックという意味は「普遍的」という意味です。

つまり「いつでもどこでもあっても通用する」価値観をもっているということ、です。私たちカトリック者は、「すべての人を一人の例外もなく愛しておられる神様」を信じている仲間たちの集まりです。その思いを心から込めて毎年、「普遍的」という神様の愛を表している映画を選んで贈っているのが「日本カトリック映画賞」です。

私は司祭に叙階されてから二十三年になりますが、いつもある同じ質問を受けるたびに絶句し、立ちすくんでしまいます。それは「もし神様がおられるなら、なぜ罪もない子どもたちが病気になるったり死んだりするのですか。もし神様が『愛である』というなら、なぜそうした子どもたちを治して命を救ってやらないのですか」という質問です。その質問を受けるたびに私の心の中では、そうした子どもたちの上にも神様の愛は確かに注がれているという信頼、病気で苦しんでいた

ちにもどれだけ深い神様の愛が注がれているか、という強い直感あるのです。神様が愛そのものであり、一人一人の人をととても大切にしておられるという直感はあるのですが、それを中々言葉にしようまじく答えられないというもどかしさがない。私も私に付きまといま

そうしたものかきさの中、この映画を観て「答えはあんなにないか」「この映画の中の子どもたちの瞳の中に、神様の真実の愛はあんなにないか」と確信しました。今度、さきほどの質問を受けたら私はこういふつもりです。「まずこの映画を観てください、それから話し合います」と。

## 大阪教区 ハイチ支援プロジェクトのハイチのカトリック放送局の放送支援を開始

大地震を体験した大阪教区が、これまでの出会いやかわりを通して独自に選んだ支援活動

二〇一〇年一月十二日に発生したハイチ大地震からちょうど四ヶ月にあたる五月十二日、大阪教区



これが今回私たちSIGNIS JAPANが「カトリック映画賞」をこの作品にあげる理由です。最後に、十年という長い間、小児がんなの子どもたちの中に「希望」を見つめ続けてきた伊勢真一監督に心からの感謝をお伝えしたいと思います。と、晴佐久神父は語った。

スタジオは全壊し、幸いにして地震の難を逃れた放送機材も全て略奪され、放送ができなくなっていました。しかし、そんな状況の中でも、放送局代表のジーン神父は、震災二週間後に、壊れた車の中に放送機材を持ち込んで、短期間で放送を再開させました。新しい放送スタジオの再建は、カリタス・インターナショナルが受け持つそうですが、それまで、大切な震災情報や被災者を勇気づける放送を発信し続けることはとても大切なことです。

ハイチの人口の約六割はカトリック信徒です。地震からの復興において、教会の果たす役割はとても大きなものがあります。ハイチの首都にあるポルト・ブランズ大司教区では、カテドラルや大司教館、大きな教会や神学校などが瓦礫となるほど完全に破壊され、想像を絶する被害となっているようです。そのような中に、三十二年間一貫して、福音宣教に大きな役割を担ってきたラジオ局があります。ハイチのカトリック中央協議会が始めたラジオ局です。その後、ポルト・ブランズ大司教区に運営が移管されました。

## ハイチ支援プロジェクトの放送機材の振込先

郵便振替

加入者名 〓 カトリック大阪大司教区

記号番号 〓 011101

017464

通信欄に「ハイチ支援プロジェクト」とお書き下さい

### 蹴足カルメル在俗者会 北海道兄弟会が教区から公認

二〇〇三年六月十六日にバチカン奉獻使徒的生活省より、蹴足カルメル在俗者会の会憲が承認されたことに基づき、管区規定等が順次整備され、二〇〇一年四月一日、男子カルメル修道会日本管区総長代理である三上和久神父から、教区管理者あてに公認団体の承認願いが出されていた。二〇〇一年五月三十一日付けで、札幌教区管理者である菊地功司教はそれを承認した。

北海道兄弟会は一九八四年十一月十八日に、東京兄弟会から分離し伊達カルメル修道院において発足。当時の会員は十二名。兄弟会には他に、東京・宇治・金沢・名古屋・山口・北九州（大分）・南九州（鹿児島）にある。

日本でのカルメル会の活動は、一九三三年に女子修道会、一九四七年に在俗者会、一九五一年に男子修道会が始まる。

蹴足カルメル在俗者会

### 旭川地区 中高生を対象にスポーツ大会を開催

大町教会 筒井 貴久

六月二十七日のスポーツ大会では、中高生は五人、青年が九人、神父様が一人集まりました。行った種目はバスケットやバレー・バドミントンなど球技を中心に行いました。

今回は特に、中高生と青年が仲良く楽しく、遊べる様に企画しましたが、中高

生たちには「とっても楽しかった。またやりたい。」と言ってもらえたし、みんな楽しく遊べていたと思います。企画した僕自身も、翌日筋肉痛になるぐらい動き回りました。楽しく運動している時には疲れて気づかないものなんですね・・・。

今後中高生たちにとって、魅力的な企画をしてい



きたいと強く思いました。

は、聖母の保護のもとにカルメル会の精神（念祷と観想によって、主のみことばに忠実に生き、イエスの聖テレジアの精神に倣って使徒的使命を果たすこと）に従って、社会の中で神との親しい生活を生きようとしている信徒の集まりである。

蹴足カルメル在俗者会北海道兄弟会の現会員は二十四名で、個人での日々の祈り・念祷のほかに、集会を真駒内教会と伊達カルメル修道院で年に十回、二泊三日の黙想会を年一回行っている。連絡先は伊達カルメル修道院で、会長は日野系さん（小樽）。

### 教会学校の黙想会 「ご聖体とミサ」をテーマに 北一条教会が開催

北一条 大関裕美子

北一条教会の教会学校は、昨年の秋から「うえるかむはうす」の子ども達と交流することになりました。「うえるかむはうす」では、昨年、初聖体を受けた子どもが十一名いたこと、その為の勉強会は手稲・月寒教会の教会学校のリーダーに来てもらっていたこと、英語ミサに参加しているけれど英語が話せない子どもが殆どと聞いていました。

先ず、「しおり」を作った。黙想会の意味（静かにして想う）を説明します。お話は五つに分かれ、子ども達の黙想会なのでゲーム・クイズも入れながら進みま

それなら、同じ敷地内なので交流できたらと考えて、久保寺神父様とマイルット神父様のお話しを得て始まりました。教会学校は月一回、その他には「ハロウィーン」「クリスマス会」を一緒にしました。子どもが少なかつた北一条教会でしたが少しずつ人数が増えてきました。

そして、念願だった黙想会もすることができました。指導はボイスカウトの黙想会の為に札幌にいら

して、マリア会の修道士・益浦仁弥さんに教会学校の為に滞在を延ばして頂きお願いしました。四月一日（木）の午前十時から夜の聖木曜日のミサ前までです。テーマは「ご聖体とミサ」です。当日は五歳〜十一歳の九名の子どもが参加。

「最後の晩餐」の絵を見ながら、最後の晩餐に至るまでのこと、イエス様の想い、弟子たちの想いを教えてもらい、聖堂に行つて聖体訪問もしました。幼



この後、ミサに参加した子ども達は六名いました。ミサ中、六歳の男の子はお母さんが恋しくて泣き始めたのですが、最後までがんばりました。昼食・夕食と一緒に取りながらの黙想会は子ども達との距離も近くなり有意義なものとなりました。「黙想会があるなら、また参加したい」と伝えてくれた子どもいたので嬉しく思っています。

## 菊地功司教への感謝ミサ と感謝の集いを開催

2010年11月17日に教区管理者就任一年を迎えるにあたり、菊地功司教への感謝ミサと、感謝の集いを行うことが決まりました。

▼日時 11月23日（火・勤労感謝の日）午前11時～

▼会場 札幌カテドラル（北一条教会）

▼ミサ後に感謝の集いを開催致します。詳細は決まり次第改めてご案内いたします。

## 菊地功司教の霊名「聖タルチシオ」 のお祝い日について

8月15日「聖母被昇天の祭日」は、「聖タルチシオ」の霊名のお祝い日にあたります。菊地司教は、その日は予てより山形教区の行事が入っており札幌教区におられません。が、「聖母被昇天の祭日」のミサの中で共にお祝いと感謝の祈りを捧げましょう。

## カトリック正義と平和全国集会を 札幌教区主催で開催

「真の共生社会をめざして」をテーマに、9月18日（土）から20日（月・敬老の日）の三日間、日本聖公会札幌キリスト教会、カトリック北11条教会、天使大学を会場に、講演会、現地学習会、分科会、人権シンポジウムを開催。

札幌開催にあたり、菊地功司教は、「社会に対して福音的価値観を伝えることは私たちの使命であり、福音に従った世界を生み出すという理想を掲げることは、私たちの主から託された大切な役割です。」とメッセージを送っています。

また、20日（月・祝）9時から北11条教会で行われるカトリック社会司教委員会主催の「人権シンポジウム」は、シンポジストに菊地功司教、幸田和生東京教区補佐司教、松浦悟郎大阪教区補佐司教の3司教を迎えて行います。

シンポジウム終了後（11時15分を予定）に派遣ミサが行われます。ともに参加し平和のために一緒に祈りましょう。

## 2010年札幌カリタス 社会福祉シンポジウムの案内

今回は、北海道円プリオが主催する「第12回生命尊重を考える講演会」（日時：9月26日13時30分～15時30分、藤女子大学講堂にて）を後援いたします。

講師に渡辺和子シスターを迎えて、「いのちの花を咲かせようーおなかの赤ちゃんは大切な社会の一員です」をテーマに、家庭機能の低下、多発する児童虐待、若年未婚妊娠と人工妊娠中絶の低年齢化など、社会の状況に対して、カトリックの立場からメッセージをお届けします。

▼入場料 一般＝1,000円（当日 1,300円）  
学生＝事前登録で無料（当日 500円）

▼問合せ 011（613）0583 円プリオ北海道へ

## フライブルグ大聖堂少年合唱団 創立40周年記念日本公演

8月21日～9月5日、全国12会場で公演

札幌では、8月25日（水）午後7時（開場午後6時30分）から藤学園講堂で行われる。

▼入場料 一般＝1,000円、学生＝700円。  
▼問合せ 札幌公演実行委員会 090-3778-9332へ。

函館では、8月27日（金）に函館五稜郭タワーアトリウムで午後4時から、FMいるかカフェペルラで午後六時30分から行われ、28日（土）には函館芸術ホールにて午前10時30分から行われる。

▼問合せ ジャパンツアー実行委員会事務局  
080-3059-2197へ

## 「第19回ネットワークミーティング (NWM) in 札幌」開催

10月9日（土）～10日（日）会場は支笏湖YH

▼テーマは「タアタンワ」。アイヌの言葉で「ここにいる」という意味です。主が「わたしはここにいる」と言ってくださっているように、辛いとき、悲しいとき、誰かに「一緒にここにいるよ」と言われるとホッと安心しますよね。神様からのメッセージを大自然豊かな北海道で感じ、今回の出会いを通して、距離は離れているけれど、わたしたちは「ここにいる！」と感じられるNWMにしていきたいと、実行委員の青年たちは張り切っている。

▼内容や申込等の詳細については、各教会にお送りしてありますので、主任司祭に問合せ下さい。参加申込は9月1日までに、月寒教会宛て申し込んでください。

## 2011年度イエズス会特別奨学生の募集

この奨学金は、上智大学または上智短期大学に入学を希望しながらも、経済的な困難を抱えるカトリック子女に入学の可能性を開くためのもので、上智大学または上智短期大学が第一志望で、各種入学試験に合格した場合に入学手続きに必要な金額を、各家庭の経済状況に応じ全額から3分の1の範囲で援助するというものです。

▼応募方法は、9月入試、11月入試、2月入試、国際教養学部に対応している。

▼問合せや応募は、イエズス会のS Jハウス院長まで。  
電話 03（3238）5055  
〒102-8571 東京都千代田区紀尾井町7-1

# 訃報

神様のみもとでの安息をお祈り下さい

## ■フランススコ会

マテオドル・シーベル神父



【略歴】  
1932年5月4日 ドイツ・チュービンゲンで生まれる  
1952年10月2日 着衣  
1953年10月3日 初誓願  
1956年10月3日 莊嚴誓願  
1958年7月20日 司祭叙階  
1960年来日し、右記の通り主任司祭等を歴任  
2008年に目の治療のために一時帰国  
2010年5月8日 帰天  
享年78歳。

## ■殉教者の聖ゲオルギオのフランススコ修道会

◇Sr. M パウリナ武藤ウメ子



【略歴】  
1921年1月15日 生まれる  
1953年12月24日 苦小牧教会で受洗  
1955年3月25日 入会  
1958年1月11日 初誓願  
1963年8月12日 終生誓願  
2010年4月13日 帰天  
樺太の豊原生まれ。戦後に家族と共に北海道に引き上げ住むようになる。調理の仕事に携わり、東京や札幌、青森と一関の児童養護施設で長年工夫を凝らしながら食事作りに専念。55年間の奉獻生活を送り、胃がんで花川マリア院にて永眠。享年89歳

## ■新潟県高田市生まれ。北見藤女子高、岩手県一関の藤保育園、一関藤の園で務め、一関と東京で支部の責任者を務めた。戦時中の15歳の時に、宣教師を助けたと言うことで家族が連行され試験を味わった経験をもつ。

【略歴】  
1928年2月25日 生まれる  
1941年8月14日 受洗  
1956年9月15日 入会  
1959年8月12日 初誓願  
1964年9月23日 終生誓願  
2008年11月3日 修道金祝

## ◇Sr. M クララ佐藤ヨネ



岩内町に生まれる。初誓願後は、本部、一関、青森の藤聖母園などで務め、八雲、留萌の支部責任者を、1980年から4年間青森藤の園マリア院の院長を務めた。子どものような信頼に満ちた強い信仰に恵まれていたという。  
【略歴】  
1915年9月15日 生まれる  
1933年12月24日 受洗  
1939年8月17日 入会  
1942年8月12日 初誓願  
1947年8月12日 終生誓願  
1991年11月1日 修道金祝  
2001年11月3日 ダイヤモンド祝  
2010年4月22日 帰天

## 教区風

「このコーナーは皆様からの思いや考え等を掲載するコーナーです」

ある「便り」を見て、アルコール依存症は、お酒の飲む量や期間、強い弱いに関係なく、生まれながらの体質で、百人に三人はなってしまう病気だと知りました。皆さん知っていましたか？  
依存症の人たちは、AA（アルコホーリクス・アノニマス）の12ステップに基づいたグループ・セラピーの回復プログラムに基づ

き、仲間たちとのミーティングや、専門家によるカウンセリングで問題の解決方法を学び、アルコールを飲まない基礎を作って、地域社会に戻って行く努力をしていることを知りました。

「AAの12のステップ」の抜粋を紹介してみます。文章が完了形になっています、自分に語りかけているところがミソなのかもしれません。

1. 私たちはアルコールに對し無力であり、思い通りに生きていけなくなっていたことを認めた。
2. 自分を越えた大きな力が、私たちが健康な心に戻してくれると信じるようになった。
3. 私たちの意志と生き方を、自分なりに理解した神の配慮にゆだねる決心をした。
4. 恐れずに、徹底して、自分自身の棚卸しを行い、それを表に作った。
5. 神に對し、自分に對し、そしてもう一人の人に對して、自分の過ちの本質をありのままに認めた。
6. こうした性格上の欠点全部を、神に取り除いてもらう準備がすべて整った。
7. 私たちの短所を取り除いて下さいと、謙虚に神に求めた。
8. 私たちが傷つけたすべての人の表を作り、その人たちが全員に進んで埋め合わせをしようとする気持ちになった。
9. その人たちがほかの人を傷つけない限り、機会あるたびに、その人たちに直接埋め合わせをした。
10. 自分自身の棚卸しを続け、間違ったときは直ちにそれを認めた。
11. 祈りと黙想を通して、自分なりに理解した神との意識的な触れ合いを深め、神の意志を知ることと、それを実践する力だけを求めた。
12. これらのステップを経た結果、私たちは靈的に目覚め、このメッセージをアルコールに伝えること、そして私たちのすべてのことにこの原理を実行しようと努力した。

如何でしょうか。アルコールのことはもちろんですが、その部分を何かに置き換えると私たちの日常生活に通じるものはありますか。  
(札幌S)

## 編集後記

子どもたちが夏休みをむかえ、家族と過ごす時間が増えます。有意義な時間をお過ごし下さることを祈っています。